

初孫

国木田独歩

青空文庫

この度は貞夫ただおに結構おんなる御品おん御贈り下されありがたく存じ候、
お約束の写真ようよう昨日でき上がり候間二枚さし上げ申し候、
内一枚は上田の姉おんに御届け下されたく候、ご覧のごとくますます
肥え太りてもはや祖父様じいのお手には荷が少々勝ち過ぎるように相
成り候、さればこのごろはただお膝ひざの上にはい上がりてだだをこ
ねおり候、この分にては小生こどもが小供のときき候と同じ昔むかしばなし
貞坊が聞き候ことも遠かるまじと思われ候、これを思えば悲しい
ともうれしいとも申しようなき感これありこれ必ず悲喜両方と存
じ候、父上は何を申すも七十歳いかに強壯にましますとも百年の
ご寿命は望み難く、去年までは父上父上と申し上げ候を貞夫でき

候て後われら夫妻がいつとなく祖父様とお呼び申すよう相成り候以来、父上ご自身も急に祖父様らしくなられ候て初孫あやしホクホク喜びたもうを見てはむしろ涙にござ候、しかし涙は不吉不吉、ご覧候えわれら一家のいかばかり楽しく暮らし候かを、父上母上及びわれら夫妻と貞夫の五人！ 春霞たなびく野辺といえどもわが家ののどけさには及ぶまじく候

ここに父上の祖父様らしくなられ候に引き換えて母上はますます元氣よろしくことに近ごろは『ワツペウさん』というあだ名まで取られ候て、折り折り『おしやべり』と衝突なされ候ことこれまた貞夫よりの事と思えばおかしく候、『おしやべり』と申せば皆様すぐと小生の事に思し召され候わば大違いに候、妻のことに

候、あの言葉少なき女が貞夫でき候て以来急に口数多く相成り近
 来はますますはげしく候、そしてそのおしやべりの対あいて手が貞夫と
 いうに至つては実に滑こっけい稽にござ候、先夜も次の間にて貞夫を相
 手に何かわからぬことを申しおり候間小生、さような事を言うとも
 小供にはわからぬ少し黙つていておくれと申し候ところ

『ソラごらん、坊やがやかましいことをお言いだから父とう様のご用
 のお邪魔になるとサ』

『坊やがやかましいのではないお前がしやべるのだよ』

『オヤオヤ今度は母かあさん様がしかられましたよ、ね坊や父様が、

「やかましツ」て、こわいことねえ、だから黙つてねんねおし』

「困るね、そんな事を言つても坊にやわからないのだからお前さ

え黙ればいいんだよ』

『貞坊や、坊やお話がわからないとサ、「わかりますッ」てお言い、坊やわかりますよッて』

右の始末に候間小生もついに『おしやべり』のあだ名を与えてもはや彼の勝手に任しおり候

おしやべりはともかくも小供のためにあの仲のよい姑しゅうとめと嫁がどうして衝突を、と驚かれ候わんかなれど決してご心配には及ばず候、これには奇々妙々の理由わけあることにて、天保十四年てんぽう生まれの母上の方が明治十二年生まれの妻さいよりも育児の上においてむしろ開化主義たり急進党なることこそその原因に候なれ、妻はご存じの田舎者いなかもにて当今の女学校に入学せしことなければ、育児学

など申す学問いたせしにもあらず、言わば昔風の家^に育ちただ
の女が初めて子を持ちしまでゆえ、無論小児を育てる上に不行き
届きのこと多きに引き換え、母上は例の何事も後^{あと}へは退^ひかぬご気
性なるが上に孫かあいさのあまり平^{へい}生^{せい}はさまで信仰したまわぬ
今の医師及び産婆の注意の一から十まで真つ正直に受けたもうて、
それはそれは寝るから起きるから乳を飲ます時間から何やかと用
意周到のほど驚くばかりに候、さらに驚くべきは小生が妻のため
にとて求め来たりし育児に関する書籍などを妻はまだろくろく見
もせぬうちに、母上は老眼に眼鏡^{めがね}かけながら暇さえあれば片つ端
より読まれ候てなるほどなるほどと感心いたされ候ことに候、右
等の事情より自然未熟なる妻の不注意をはなはだ気にしたもうと

いう次第しかるに妻はまた『母さまそれは「母の務め」の何枚目に書いてありました』などとまぜ返しを申し候ことなり、いよいよ母上はやつきとなりたもうて『お前はカラ旧癪きゆうへいだから困る』と答えられ候、『世は逆さまさかになりかけた』と祖父様大笑いいたされ候も無理ならぬ事にござ候

先日貞夫少々風邪かぜの気けありし時、母上目を丸くし

『小児が六歳までの間に死にます数は実におびただしいものでワツペウウ氏の表には平均百人の中十五人三分と記しるしてござります』と講義録の口調くちようそっくりで申され候間、小生も思わずふきだし候、天保生まれの女の口からワツペウなどという外国人の名前を一種変てこりんな発音にて聞かされ候ことゆえそのおかしさまた格

母車ぼに乗せてそこらを押しまわしたきお望みに候間近々大憤発をもつて一つ新調をいたすはずに候

一輛りようのうば車で小児も喜び老人もまた小児のごとく喜びたもうかと思えば、福はすでにわが家やの門内に巢食いおり候、この上過分の福はいらぬ事に候

今夜は雨降りてまことに静かなる晩に候、祖父じい様と貞夫はすでに夢もなげに眠り、母上と妻さいは次の室まにて何事か小声に語り合い、折り折り忍びやかに笑うさま、小児こどものことのほか別に心配もなさそうに候

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「太平洋」

1900（明治33）年12月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初孫

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>